



「多文化パワー」社会 多文化共生を超えて

毛受 敏浩
鈴木 江理子 編著

国際交流の事例冷静・感動的に

日本に住む外国人は二百万人を超えた。他方、外国に住む日本人も百万人になるとい

「多文化パワー」。

域が、総じてうまくいっている。

二〇〇五年末現在、長野県には四万二千人を超える外国人登録者数があり、総人口の1.95%を占めるようになった。ほぼ五十人に一人の割合である。しかも、国際結婚の比率は8.1%で、東京都の9.5%に次いで全国二番

他方、阪神・淡路大震災以降、「多文化共生」は外国人とのぞましい関係をあらわすキーワードとなった。しかし本書は、多文化共生を超えた視点を打ち出すこととしている。その意欲的なところもかなり成功している。という

山形県の過疎の農村にやってきたフィリピンや韓国からの外国人花嫁が地域をよみがえらせた事例報告は、同様の悩みをかかえるところの参考となるにちがいない。とりわけ外国人花嫁を雇用してキムチ・ビジネスを立ち上げ、外国人起業家としても注目を浴びている韓国花嫁の「梅ちゃん」は元氣印の家徴だ。

目である。

本書は、とかく問題をかかえた人ひととみなされがちな在住外国人を、ユニークな文化的特質や独自のネットワークをもった人たちとしてとらえ、またその潜在力が地域社会の活性化に貢献していることに焦点を当てている。称して

感動的に分析・記述されているからである。

とくに興味をひいたのは、行政とは無縁の市民が立ちあがって粉骨砕身、懸案の問題の解決に向けて国際交流をリードした点である。そうした活動に行政が理解を示し、支援を惜しまなかった地

域が、総じてうまくいっている。

神戸の震災後、流言飛語がまん延しないように、また必要な救援情報が多言語で発信されるようにとの願いからはじまったボランティア・ベースのミニFM放送。それがNPOに成長し、そこで活躍す

(明石書店・二四一五円)

編著者の毛受氏は日本国際交流センター、チーフ・プログラムオフィサー。鈴木氏は立教大兼任講師。

【評】中牧 弘允 (国立民族学博物館教授)

